

かたの瓦版

この時、交野は動いた

「事実起こったこと」

この地蔵菩薩立像はもと河内国交野郡星田村愛染律院にあったのを明治五年に岡山県の高山寺へ移坐されたものです。



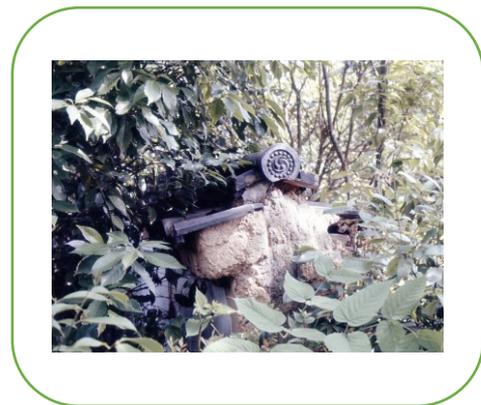
地蔵菩薩立像



後方



背剝板(銘文)



新宮山・愛染律院土塀跡

地蔵菩薩立像の胎内から

昭和29年修理の際、胸部から五穀が現れ、背面下部の背剝板の裏面に銘文が書かれていた。内容は宝永四年(1707)10月4日の大地震による近畿地方を初め中・四国の災害を付記した、死没者の慰霊文、及び同年11月23日の富士山の爆発、それによる小富士すなわち宝永山の出現状況を記したもので珍しい記録の一つといえる。

書かれたのは大坂の東北約20^{キロ}の星田においてである。

井原市寺中 高山寺

銘文内容は次のとおり

当年大阪・四国・中国にて失たる者悉皆成仏・十方法界悉皆成仏^{しっかいじょうぶつ}地蔵菩薩天下太平天長地久」聖徳太子時代とり仏師作也、宝永四丁亥十二月日」当時安全長久願主安全」(上部)。当年十月四日大じしん大阪にて家國中九分くづれ一分のこる。

大地しん昼四つ時つなみ晩の八つ時也」つなみになかれたる橋三十五くずれ方々の入船出船百そうくずれ船山に上る大阪にて人六万人しする其外はしれず」あはちにて船三十そう人一万人しするきのくににて船五十そうつなみ地しんにて人三万しする」其外中国四国にて三十万程しする十月より十二月まで小地しんゆる事百度也」同十一月ふじの山やくる事よるひる十五日が間江戸するがにすなふり小石ふる事二十日間なり」あるいは砂五寸三寸五尺八尺一丈二丈つもる事所によりて大小ありこれみなふし山のやけ」石すなふり里家みなふりうめる所大分大分に人しするふし山三里四方やけやるなり」其時にふし山の下に小ふじという山夜の間に来るこれすなわちふき付てつもりたる山なり」ふし山にあなあくそれよりすな石ふき上て山となる」(下部)。

ただしこれは災害の恐怖まだ消えやらぬ頃、風評をそのまま書いたものだが、文露叢(嫌日歴所引)には「大坂庄戸一万六百、圧死三千廿口、(中略)自廿二日午時至明日辰半、地震三十次、富士郡民屋

だいたい

大類、巳時富士山鳴動、自樹林處、烟雲噴出如晦、^{ひるこれけんえん}昼惟見烟、夜間皆火」と見える。

オッサンのひとり言

★星田村から養子か嫁に行かへった寺とは

高山寺で岡山県井原市の西部高屋町にあり、天平3年(731年)行基菩薩により開基されたと伝えられています。高山寺には、国指定重要文化財の不動明王坐像、地蔵菩薩立像が安置されている。



真言宗別格本山高山寺



不動明王



地蔵菩薩

★この仏像二体は寺の創建当時からのものではないらしい

不動明王坐像は山城国綴喜郡(京都府)八幡山禅法寺から、地蔵菩薩立像は我が町・愛染寺で見染められた

★どのような経緯のもとで

それは分らない、分らないことは分らない

★大きさ、材質は

仏高は1.55 尺の寄木造りである。木彫は藤原時代の頃からほとんど桧になるが、この材質は桜らしい。

★いつ頃の廃寺となった

愛染寺は明治の初めには無住となり荒廃の道を進んだ。

★蓮月尼の生涯

幕末の女流歌人、養子を迎えて子ども四人を生んだが、いずれも早世、夫も若くして没したため、菩提を弔うため尼となった。

愛染律院の茶所に寓居、後に京都神光院に移り住み、明治8年85才で没した。

=宿貸さぬ人のつらさを

情けにて

おぼろ月夜の

花の下ふし=



あるとき一夜の宿をたのんだところが断られた。

断れたときは、この夜空の下で朝を迎えなければならぬのかとつらい思いをしたけれど、ふと気がつくと月の光をうけてなんの花か咲いている。

宿を断られたため、かえっておぼろ月夜に咲く花という美しいものを見ることができたという喜びの歌であります。宿を断られることは辛い、しかしいつまでもそのことで腹を立てていたのでは美しく咲いている花を見いだす心の余裕ができない。

一時の腹立ちを忘れ、喜びを見出しうる心の余裕を持った人だけが境遇を生かし、随所に自分を生かしていける人だと。逆境を順境にかえ、災いを以って福となしマイナスをプラスにしていく・・・日常生活の中でもこのような場面にたびたび遭遇することがあろうと思われませんが、その時蓮月尼の詠んだ歌を思い出して下さい。

参考資料:「日本人らしく」高田好胤著

=了=